

『タイの田舎で嫁になる — 野生的農村生活』

森本薫子著、めこん、2013年

2017年9月、本書の舞台となるカオデー農園に訪問する機会をいただいた。到着してすぐに、多種多様な果樹、野菜や野草の畑、田んぼ、魚を育てている池、家畜小屋(鶏、アヒル、豚、牛)、そしてチーク林…と、3.5ヘクタールの敷地をじっくり案内してもらったが、元々は放置されたサトウキビ畑だったやせた土地にゼロからつくりあげたとは思えないほどの「豊かな」姿だった。

このカオデー農園、日本国際ボランティアセンター(JVC)の元駐在員である著者の森本薫子さんことカオルさんとお連れ合いのデーさん、それぞれの名前をとってつけられたそうだが、タイ語では「赤い(デー)・お米(カーオ)」つまり「赤飯」というおめでたい意味があるとのこと。

国際協力NGOスタッフから、イサーンと呼ばれる東北タイ地方で「農家の嫁」になったカオルさんの目線で、農村での暮らしや食生活、子育てやご近所付き合いについて、ユーモラスに、そしてあたたかに語られる本書。カラー写真もたっぷり、あっという間に読めてしまう一冊だ。

野川未央(のがわ・みお/APLA)

※詳細は版元めこんの公式サイトへ www.hanmoto.com/bd/isbn/9784839602673



特定非営利活動法人 APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン (ATJ)
バラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係をつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらへ
特定非営利活動法人 APLA

今月のTOPIC

人から人へ PtoP ピープル NEWS vol.20 2017.11

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

フィリピン・東ティモール・ラオスの
若手農民が出会って変わった!



パッキングセンターでの作業の様子

バラゴンバナナを洗浄・箱詰めしている パッカーの皆さん from フィリピン・ネグロス島

バラゴンバナナは収穫された後、パッキングセンター(以下:PC)で洗浄・箱詰めされています。現在10カ所のPCがあり、1つのPCでは約10人のパッカーが作業をしています。

作業時間は産地によって異なります。たとえば、畑が比較的PCの近くにまとまっているミンダナオ島のツピやレイクセブでは、午前中から作業が始まり、夜には終わります。畑が点在しているネグロス島などでは、集荷に時間がかかるため、PCでの作業は夕方から始まり、バナナの量が多いと作業が終わるのは翌朝になることもあります。

最初に熟度やサイズなど、バナナが出荷基準を満たしているかどうか確認をします。そして洗浄です。バラゴンバナナは化学合成農薬を使用せず育てているので、虫がついていることがあります。そのため、丁寧に洗浄しなければならないのですが、細かいところは洗いづらく大変です。パッカーの皆さんは口をそろえて「バナナとバナナの間を洗うのが難しい!」と言います。

洗浄後は、バナナの軸の形を整え、箱詰めするために指定の量になるよう計量をします。房の大きさが異なるバナナを

一定の重さに計量するのは難しく、慣れていないと、何度も房を入れかえて、重量を調整する必要があります。経験を積んだパッカーは房の大きさと重さの見当がつくので、計量作業もスムーズに進みます。

最後は箱詰め。おそらくこれが一番経験の間われる作業です。多国籍企業のプランテーション・バナナは房の大きさが均一なので、毎回同じように箱入れをすることが可能ですが、バラゴンバナナはそうはいきません。様々な大きさのバナナを箱詰めしていくのは、まさにパズル。房の大きさを見ながら入れる順番と場所を考えていかないと、全てのバナナを上手に箱詰めすることができません。

パッカーの皆さんには、そんな熟練した技術が必要なのです。PCでの作業は、毎週または隔週で2日程度なので、多くのパッカーは他の仕事もしています。ミンダナオ島のツピでは地域のキリスト教徒とムスリムと一緒に働いており、両者の平和的な関係性構築に貢献しているとも言われています。

このように、バラゴンバナナは生産者以外にも重要な役割を担う人たちがたくさんいます。パッキングセンターで働くパッカーたちは、まさに縁の下の力持ちです。

黒岩竜太(くろいわ・りゅうた/ATJ)

民衆交易を陰で支える現地の方々を紹介します!



バラゴンバナナの詳細はオルター・トレード・ジャパンのサイトへ <http://altertrade.jp/balangon>



フィリピン・東ティモール・ラオスの 若手農民が出会って変わった!

三カ国交流最後の国、
ラオスにて



若手農民交流プロジェクト

2016年10月から1年間にわたり、フィリピン、東ティモール、ラオス3カ国の若手農民交流プロジェクトを実施しました。

この地域は、サトウキビやコーヒーなどの単一作物の栽培地。単一換金作物だけに頼らない、より持続可能な農業を実践して周囲に広めていくために、何ができるかを共に考えました。2010年～2011年にAPLAが実施したフィリピンと東ティモールの農民交流プログラム後、それぞれの地域での取組みに大きな成果が出

てきているため、「交流」のつづきを再確認し、今回はさらにラオスも加わっての交流をしました。各国から、地域の農業を担っていく20代～40代の若手農民がメンバーとして参加。お互いの国・地域を訪問し合い、メンバーの農地の視察や様々なワークショップ、意見交換などを重ねました。プログラムが進むにつれて、参加者の表情、考え方や言葉、そして行動に変化が表れてきたのが印象的でした。交流を深めながら、新しい価値を発見し、自分たちの農業や地域のこれからの見つけ直しました。

フィリピン・ネグロス島より

エムエム、ジョネル、 ミックミック、マイケル

フィリピンからの参加者のうち2人は、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)*の運営やそこの研修を担い、卒業生のフォローアップをしているスタッフ。他の2人はKF-RCでの研修を終えて、自分の地域で循環型有機農業を実践している若手農民です。その知識と経験にもとづいた言動が、他の2カ国の参加者たちが行動を起こすモチベーションを与えました。

交流終了後、KF-RCでは、農場内に植えているコーヒーの収量を上げるため、2カ国それぞれから学んだ剪定技術を実践したり、東ティモールのメンバーと共に作った水源保全の井戸のメンテナンスを継続したりと、交流に参加したメンバーがその経験を周囲に広げています。

*フィリピン・ネグロス島で畜産複合循環型農業を実践する農場兼農民学校。毎年地域の若者たちを研修生として受け入れ、住み込みでの農業研修を実施している。

東ティモール・エルメラ県より

アグス、マルコス、 マルセロ

コーヒー生産者であると同時に、ここ数年、作物の多様化による収入の安定化と自給率の向上、地域の水源保全活動などに取り組んできた3人は、地域の人びとに新しいことを伝え、実践してもらうまでの難しさを共有してくれました。それに対して2カ国の参加者からは「言葉だけで伝えるのではなく、まずは自分たちがやってみて結果を出すことで、違いを見せるのが一番」という提案をもらいました。

フィリピン訪問後は「KF-RCのように、地域の若者たちが循環型農業を学び、実践できる場を自分たちも創りたい!」と、コミュニティーセンターに住み込んで様々な準備を始めています。また、収入の多様化につなげるために、フィリピンのメンバーから学んだ養豚のノウハウについて、地域でワークショップを開き、実践がスタートしました。

ラオス・ボラベン高原より

タイ、シット、ノイ

今回のようなプロジェクトに初めて参加したコーヒー生産者の女性たち。ラオスでは、ジャイ・コーヒー生産者協同組合(JCFC)で参加者を募って選考をした結果、偶然に3人とも女性に決まりました。男性の中でも物怖じすることなく積極的に行動する姿は、訪問先の女性たちの刺激にもなっていました。

フィリピンや東ティモールのメンバーと比べると、自分たちが今後地域でリーダーシップをとっていくという意識はまだまだ生まれていませんが、交流を通じて学んだ有機堆肥の活用や家庭菜園での作物の多様化、会計の記録つけなどを自分の家で実践しはじめています。

百聞は一見に如かず

外部者が言葉で説明するよりも当事者同士が出会い、五感で感じることが行動を起こす一番の力になる。今回の交流プロジェクトを通して、そのことを私たちスタッフが再確認しました。彼・彼女たちの今後の変化にも引き続き寄り添っていきます。

櫻井秋那(さくらいあきな/APLAボランティアスタッフ)

KF-RCではラオスのコーヒー生産者に教えてもらいながらコーヒーの木を植えた



ラオスのメンバーたちは交流の中で学んだことを自分の畑で実践しはじめています